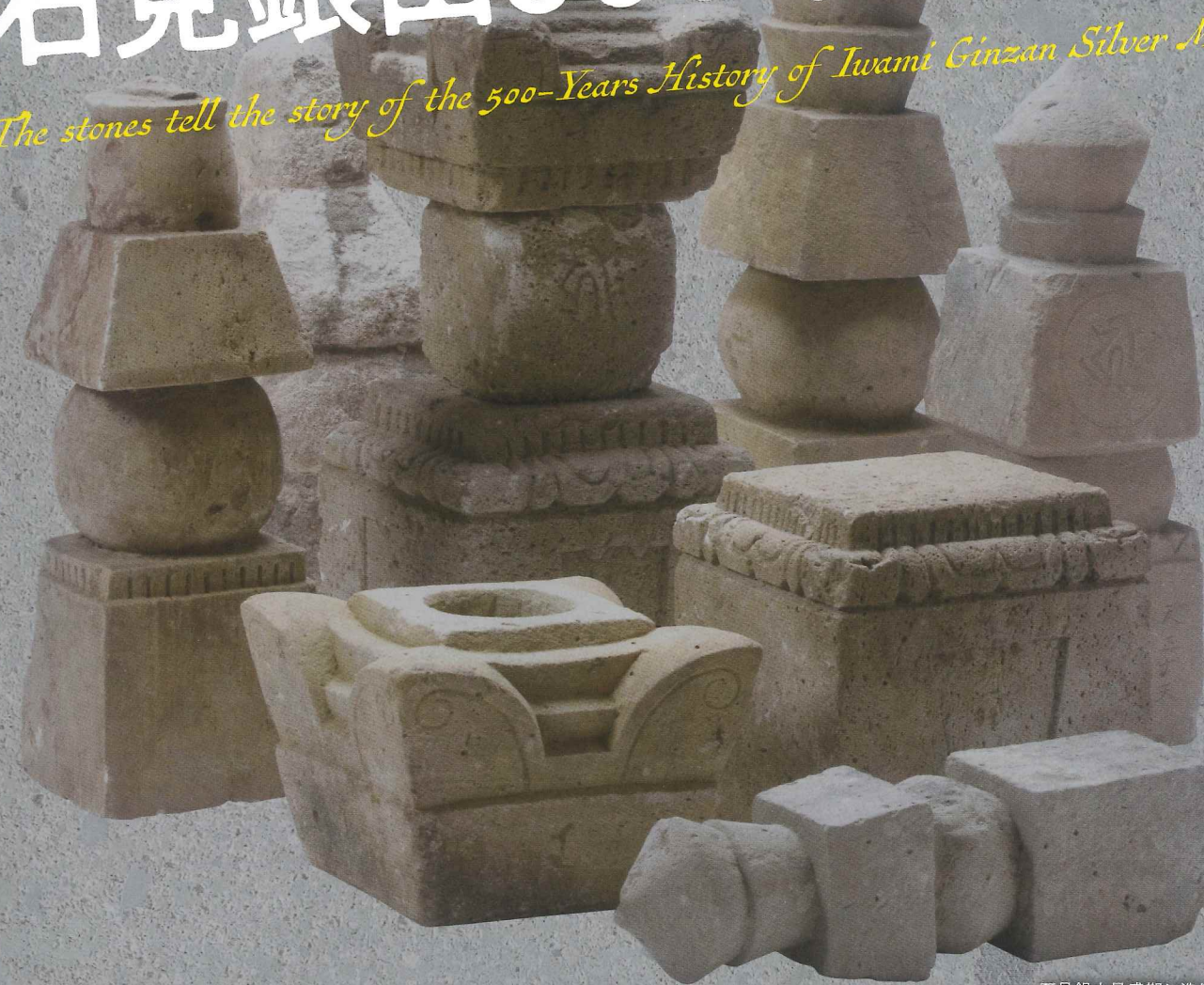


「石」は語る

石見銀山500年の歴史

The stones tell the story of the 500-Years History of Iwami Ginzan Silver Mine



石見銀山最盛期に造り出された石造物
(五輪塔・宝篋印塔)



港町・温泉津での石造物調査の状況



石見銀山大谷地区での石造物調査の状況

石見銀山にある石造物

石見銀山には、500年の歴史の中で造られた様々な石造物があります。これらの石造物一つ一つが銀山に生きた人々の姿を今に伝えてくれています。ただ、一部の著名な石造物以外は、その実態について長らく不明なままでした。

そこで、平成9～15年度に石見銀山遺跡・温泉津について石造物の分布調査を行った結果、大森地区5,400基、銀山地区6,200基、温泉津地区3,000基の合わせて約14,600基以上が確認されました。並行して毎年少しずつ詳細な記録化(図面作成・写真撮影)を行い、現在では約1/3の詳細調査が終了しています。

この長年の調査により、銀山史に光をあてる重要な発見があったほか、膨大な調査データの分析により石見銀山に生きた人々の動態が明らかになりつつあります。

それでは、これまでの調査成果をご紹介します。

神社・寺院・町並編

神社や寺院には、人々が様々な思いを込めて寄進・奉納した石造物が数多くあります。いろいろな形や刻まれた文字を読み解くと、銀山史の一コマを垣間見ることができます。



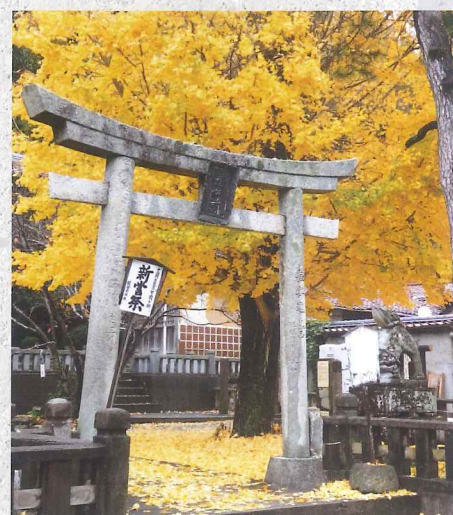
燈籠(大森・豊栄神社)

燈籠は寺社の参道や境内にあります。この燈籠は、慶応3年(1867)に大森陣屋に駐屯した長州藩士が寄進したものです。



石碑・石敢當(大森・龍昌寺/温泉津地区)

石碑は、人物や事業の功績を後世に末永く伝える役割があります。石敢當は、魔除けとして信仰されるもので中国南部に起源をもちます。日本でも沖縄や南九州で見られますが、鳥根県では温泉津で発見されたものが唯一の事例です。



鳥居(温泉津・龍御前神社)

鳥居は神社の参道や境内にあります。柱には寄進した人物や年号などの文字が刻まれています。

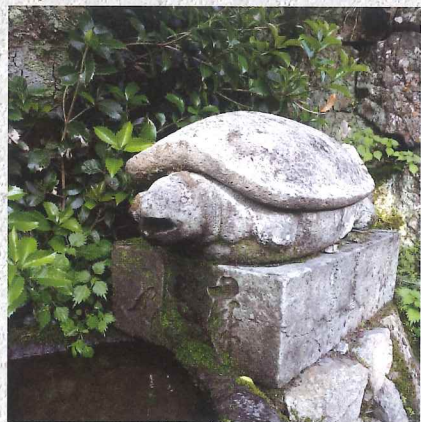
狛犬(大森・城上神社)

狛犬は、時代や製作地によって様々なバリエーションがあります。他地域との交流史を語るうえでも重要です。



用水桶(大森・豊栄神社)

用水桶は、幕末に長州藩士が寄進したものです。山口県内ではよく見られますが、鳥根県内では稀な石造物です。



吐水神獣(大森・佐毘売山神社)

手水の吐水口に四神の一つである亀の形をあしらったもの。安政7/万延元年(1860)に銀山附地役人の子弟達が寄進したものです。

お墓編

石見銀山や温泉津には、数多くのお墓が造られました。当時のお墓は一人に一墓石であることが多いので、銀山史の中に埋もれた人々の姿を私たちに示してくれます。



奉行・代官墓(大森・龍昌寺跡)

石見銀山は江戸幕府直轄地だったので、現地の支配のために奉行や代官が派遣されました。

このお墓は、江戸中期に銀山の生産体制の改革に成功した川崎平右衛門定孝の供養墓です。



江戸時代の墓標

17世紀末(元禄ごろ)から五輪塔・宝篋印塔と入れ替わるように、近世的な墓標が登場します。当初は位牌形、円頂六角形などの形もありますが、18世紀中頃以降は円頂方形・円頂方柱といった現在のお墓と同型のものが主流となります。



五輪塔・宝篋印塔

これらの石塔の形は、平安時代末から続くもので中世を代表する墓石の形です。鎌倉・室町時代までは僧侶や有力な武士階層のお墓として造られました。

石見銀山では16世紀後半～17世紀まで、武士だけではなく、銀山師を筆頭に銀山で働いた多くの人々のためにこれらの墓塔が数多く造られました。



板碑(大森・大谷地区)

板碑は、中世を代表する石造物といわれますが、鳥根県内では約20例しか確認されていません。(小型板碑を除く)

特に、石見地域では鎌倉・室町時代の板碑は確認されていませんが、石見銀山では16世紀中頃～17世紀初頭の板碑があることがわかってきました。

このことから、石見銀山に板碑を造る習慣のある他の地域の人々がやって来て、鉱山経営・採掘に携わったことが想定されます。



港町にある小さな石仏

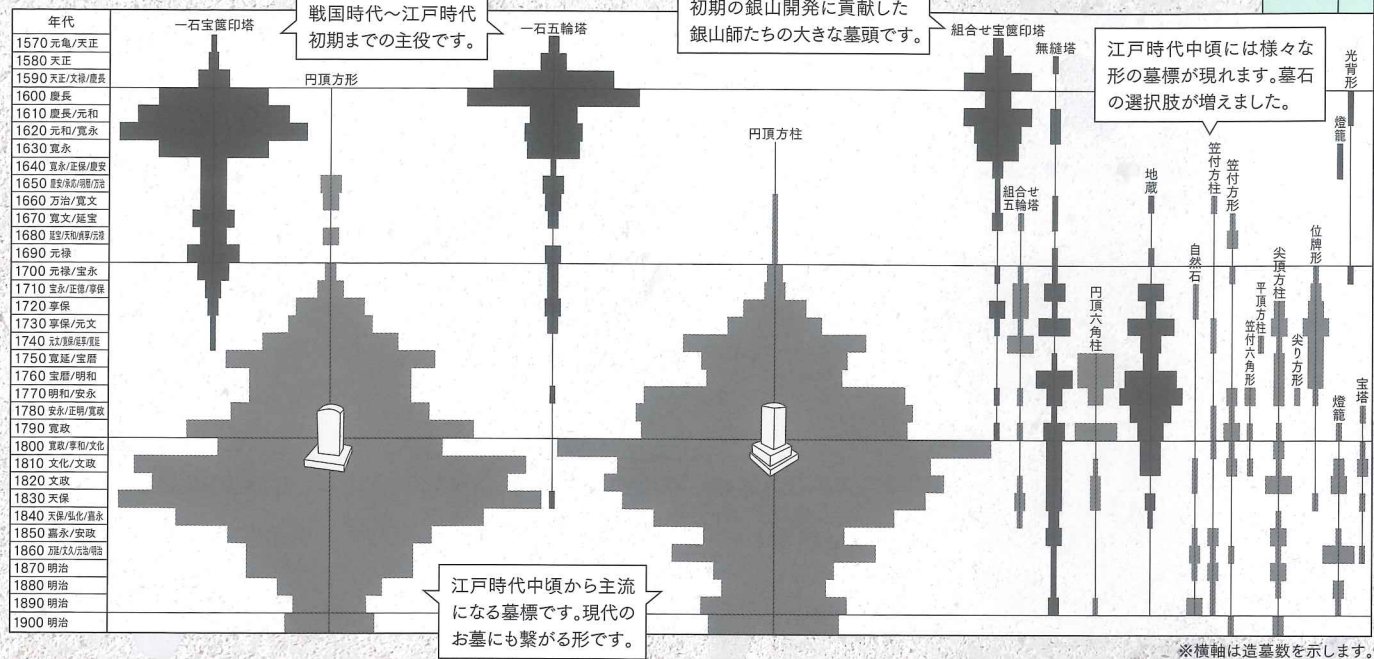
温泉津や宅野などの港町を中心に点在する小さな石仏です。「板碑」の小型版であることから小型板碑と呼ばれています。これらは福井県若狭地方や京都府北部で産出する「日引石」「伊根石」などの石材で造られたものです。日本海を航行する船の船底にバラストとして積まれ、各地で荷物を積み込む際に停泊港に下ろされたものです。日本海交易の様子を語る証人とも言えるでしょう。

墓石が語る銀山史

石見銀山での墓石の形の移り変わり

石見銀山遺跡では、16世紀後半から墓石が出現します。江戸時代前期までは、中世から造られている五輪塔・宝篋印塔などが主流です。17世紀末の元禄ごろから多様な形の墓標が登場しますが、やがて「円頂方形・方柱」というシンプルな形に落ち着きます。この形は現代のお墓につながるものです。

石見銀山の墓石形態とその変遷



ここがポイント！

銀山地区の墓石数変遷

- 16世紀末～17世紀初頭に第1期の造墓ピークがあり、その後は銀の生産量の減少と連動して造墓数も減少します。しかし、18世紀後半～19世紀前半には産銀・産銅量の安定化に伴って第2期の造墓ピークが訪れます。
- 当初から子ども、女性のお墓も多く造られています。

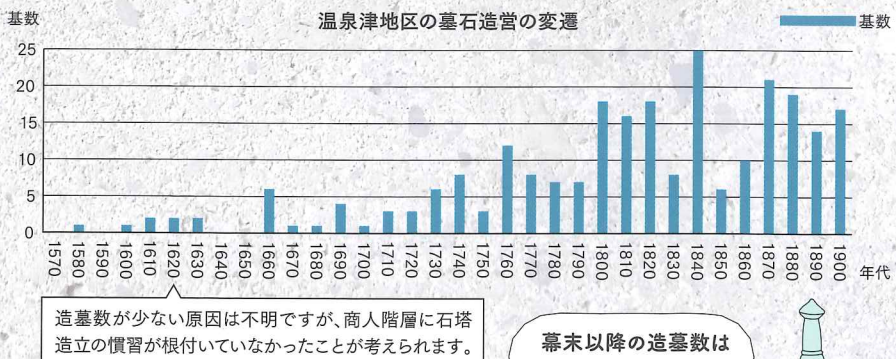
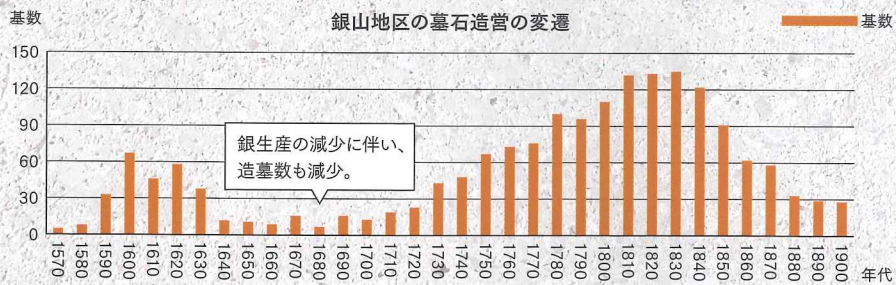


墓石の数を調べることで銀山の変化がよくわかるね！

温泉津地区の墓石数変遷

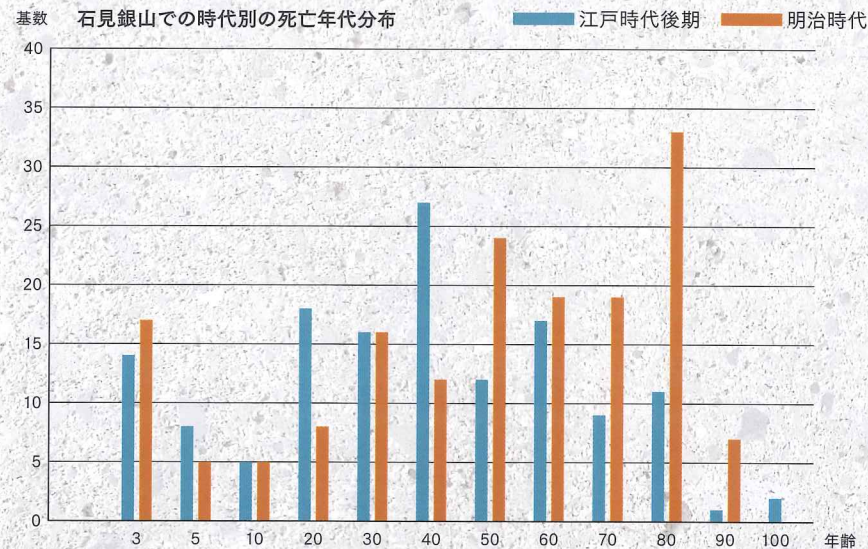
銀山地区との違い

- 17世紀初頭の造墓数は銀山地区よりかなり少ないです。
- 18～19世紀はおおむね銀山地区と同じ傾向ですが、極端に造墓の少ない時期があります。
- 幕末～明治期の造墓数はやや減少傾向ですが銀山地区と比べて減少幅は緩やかです。日本海航路の舟運量は安定しており、銀山の盛衰の影響は比較的小さかったのです。



石見銀山の人々の寿命は？

江戸時代後期の石見銀山内の平均寿命は35歳前後です。現代の平均寿命と比べるとかなり短いですが、江戸時代は一般的に子どもの死亡率が高く、他の農村や都市と比べて、石見銀山が必ずしも短命であるとは言えません。明治時代になると衛生環境が改善され、平均寿命は45歳前後となるようです。



お墓から平均寿命がわかるんだね。現代の平均寿命と比べると当時はかなり短命だね！

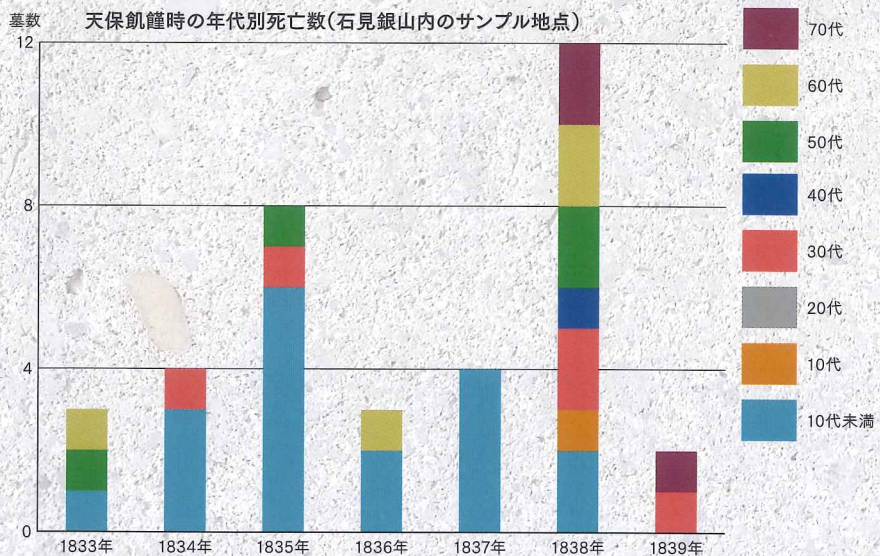


子どものお墓(大森・龍昌寺跡、徳善寺上墓地)

石見銀山では、墓塔造りが盛んになった16世紀末から子どものお墓がたくさん造られています。子どものお墓は、戒名に「童子・童女」などが使われます。

石見銀山を襲う天保の飢饉

天保の飢饉(1833～1839年頃)は東北地方を中心に広く全国に及んだ飢饉ですが、石見銀山御料も大きな影響を受けました。飢饉中は米価が過去10年の平均価格の2倍以上となり、米の入手を外部に頼る銀山地区民は大変困窮しました。銀山では墓石の数の検討から、飢饉中は例年の約2倍の死者数が出ていることがわかります。飢饉の前半で体力のない幼児・子どもが多く死亡していますが、飢饉の後半ではそれまで耐えていた大人の死亡者が増加しています。



飢饉の時には、子どものお墓が増えるんだね！



天保9年(1838)に亡くなった人のお墓(大森・定徳寺脇墓地)

埋葬をめぐる謎

石見銀山のお墓をめぐる最大の謎は、遺体の葬り方がよく分からない点です。多くの墓石の下は岩盤で、遺体を納めるのに必要な大きさの墓穴が掘れません。また、多くの墓石が密に接していて墓穴を掘るスペースも足りないのです。江戸時代の一般的な葬法は土葬ですが、墓地空間の限られる都市部では火葬をする地域もあります。しかし、銀山内の墓地では火葬骨なども確認されていません。かつて民俗学で提唱された「両墓制」は、埋葬地と礼拝地を分けるものです。石見銀山内も両墓制であった可能性があります。今後の研究が待たれます。



どうやって埋葬していたんだろう？

僕もよく知らないんだよ...



大森・妙本寺上墓地

岩盤の上に営まれた石塔群。狭い範囲にたくさん石塔が密集しています。直下は岩盤なので土葬には適しません。火葬骨も見つかっていません。

お墓は知っている

この場所にあることが大事

ご先祖を葬るお墓は良い場所に造りたいですね。実は、江戸時代初めごろに石見銀山内に造られたお墓は、ある狙いをもってその場所に造られたと考えられます。

お墓がどこにあるのかという点に着目すると、銀山の住人や外部からやってくる人々に対してお墓をアピールする狙いが見えてきます。



道から見上げればそこには…!

大谷地区・坂根口番所跡付近の大型宝篋印塔群

街道を見下ろす

龍源寺間歩のある大谷地区は、坂根口・畑口番所に隣接し温泉津や仁摩方面からの訪問者が通行する要衝です。大谷地区の街道を見下ろす傾斜40度の斜面には、狭長な平坦面を造成して大型宝篋印塔や石廟(7Pを参照)が設置されています。16世紀末〜17世紀前半の限られた時期の墓地ですが、右記の佐毘売山神社周辺の墓地と同様に街道を行きかう人々に視覚的に訴える効果を期待したものと思われる。

仙ノ山の石銀地区からは大森町がよく見える

大森町を見下ろす

仙ノ山山頂近くの石銀地区は、標高460〜480mの高地に位置する職住兼備の集落がありました。周囲の丘陵上には16世紀末〜17世紀前半の墓塔が数多く立てられています。

一見すると丘の上の墓地は石銀集落を見下ろしているように見えますが、実はその先には遥か下界の大森町が見えるのです。銀山支配の町である大森町の駒ノ足や観世音寺まで見下ろせるこの場所を選んで墓を築いているのは銀山師の気概かもしれません。



大森町が一望できて、とても綺麗だね!



仙ノ山中腹から大森町を望む

階段がいっぱいで登るのが大変だ!

「山神」さんの境内に立ってみる



佐毘売山神社を参道階段下から見上げる

佐毘売山神社から見える場所

佐毘売山神社は、「山神さん」として親しまれる鉱山の神様です。石見銀山では銀山地区の栃畑谷、毘布山谷、出土谷という最初から稼働している主要な産銀地域の中に位置しています。

実は、佐毘売山神社拝殿前の境内(標高230m)に立って周囲を見渡すと、左右と背後の丘陵上には16世紀末〜17世紀初頭にかけて造立された大型宝篋印塔群をはじめとした多数の墓塔が林立しているのです(現在は森林に隠れてよく見えないのですが)。

神社境内を取り囲む形で石塔が立てられていることから、神社に集う人々に銀山大盛を招いた名銀山師の聖域であることをアピールする効果を狙っているのかもしれない。

大きさvs荘厳さ



巨大宝篋印塔

石見銀山が最も栄えた江戸時代初頭には高さ1.5〜2.3mの巨大宝篋印塔が各所に造られました。これらの石塔は、中世までは有力な武士や、僧侶しか建てることのできないものでした。

江戸初期には経済力のある農村の富豪層でも造塔が可能となったようです。石見銀山でも銀生産に成功した銀山師クラスの人たちがこぞって巨大な宝篋印塔を建てました。

写真は、温泉津・恵瑠寺にある大田市では最大クラスの巨大な宝篋印塔です。復元高は、236cmです。

すごく大きいね! 僕も早く大きくなりたい!



勝源寺・竹村丹後守道清の石廟と墓塔



美郷町・下波多野家の石廟

石廟

石廟は内部に五輪塔や宝篋印塔を納める石製の覆屋です。石見銀山では17世紀前半頃から温泉津の福光石を用いて製作されます。

福光石という石材は「石廟」用の建材として開発された可能性があります。2代目奉行の竹村丹後守の墓石である宝篋印塔を納めるために開発された石廟が端緒となり、その後竹村に関わる要人の墓に導入されているようです。巨大な石塔がもてはやされた後、石塔は小型でも墓石を覆う上屋を設けて亡くなった人を手厚く厳かに祀る、という方向に墓の流行も変化したようです。



岩窟

石見銀山や温泉津では、住宅の背後や山の岩肌を横から掘り込んで、岩窟を造ることが各所でなされています。坑道を掘って銀採掘を行う技術があれば、岩窟を掘ることなどは容易なことだったといえるでしょう。

この岩窟内に墓石や仏像、小祠などを祀ることが多く、関東・鎌倉の名所ともいえる「やぐら」に匹敵する景観を造り出しています。

写真は銀山地区・龍昌寺跡の岩窟で、内部に17世紀初頭の宝篋印塔2基が設置されています。

お墓があらわす権力や経済力

権力やお金を持っている人は、そういった「力」をお墓で表現する時に、「大きいお墓」「荘厳なお墓」が理想形でした。

ただし、これが両立して実現できたのは、大名など限られた人でした。石見銀山では奉行・代官、地役人、有力銀山師が大きくて荘厳なお墓を造ろうとします。

江戸時代初期までは、大久保長安(おきくほながやす)のような巨大石塔が多く造られました。ところが、大久保長安の死後、大久保家が一家断絶された事件を受けて巨大石塔を志向する路線は方向転換しました。

その後は、2代奉行竹村丹後守墓のような石廟や燈籠などを設けて荘厳化・厚葬化する方向に向かいました。

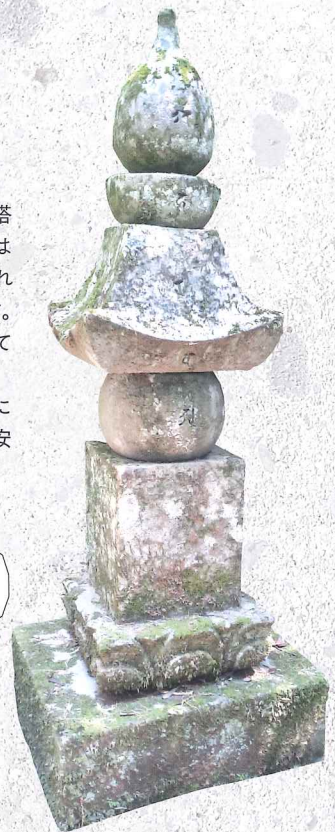
巨大五輪塔

五輪塔は中世以来の典型的な墓塔の形として知られます。石見銀山では小型の一石五輪塔が数多く造られましたが、大型のものは少ないです。江戸時代中ごろ以降の僧侶墓として大型の五輪塔が造られています。

右の写真は、寛政6年(1794)に再建された初代奉行・大久保長安の供養塔(10Pを参照)です。



わたしに似ている形だね!



江戸時代初期の灯籠が残っているなんてすごいね!

石燈籠

石見銀山では江戸時代中期以降に寺院・神社の参道・境内や代官の墓などに燈籠が寄進されています。

近年、江戸時代初頭にまで遡る燈籠が発見されており注目されています。

お墓に燈籠があるということは、継続的な参拝・供養が行われ、その都度灯明が点けられることを意味します。

大田市仁摩町・庵寺石塔群の石燈籠



Topic

石造物見学のコツとポイント

石見銀山の石造物は、さまざまな石材で造られています。大田市内で採取できるデイサイトなどの火山岩や福光石に代表される火山礫凝灰岩・凝灰質砂岩が主役といえます。

しかし、中には遠く瀬戸内海沿岸で採取・加工された花崗岩製のものや若狭湾周辺で採取・加工された日引石製の石造物も舟運により運ばれているのです。

石材をみると当時の交通交易や石材加工技術の様子が垣間見えます。

石材を見る

デイサイト

大田市南部で多く産出する火山岩です。15～16世紀前半に地元で造られた石塔はこのデイサイトを使っています。やや硬くて石材中に気泡や角礫のブロックを含むため精緻な加工が難しい石材です。



目が粗くて、小石のブロックがたくさん見えるよ！

銀山地区・龍昌寺の宝篋印塔

すごく白いね！「白い石塔」って本当にあるんだね！



銀山地区・龍昌寺の宝篋印塔



とても硬いね！産地によって白色や赤味がかったものもあるよ！



花崗岩

中国山地や瀬戸内海沿岸で産出する火成岩（深成岩）です。鎌倉時代ごろから瀬戸内の神戸、岡山、尾道などで製作された花崗岩製の石造物が山陰地域にも運ばれています。

江戸時代になり西廻り廻船の往来が盛んになると銀山御料内にも多くの花崗岩製石造物が持ち込まれました。硬質で加工が難しいことから、福光石や来待石を扱う石見・出雲の石工技術とは異なる加工技術が必要となります。



青みが掛かった色合いで、いろいろな礫のブロックが見えるね！

福光石（凝灰岩）

1630年代から白色凝灰岩に替わって石見銀山御料を中心に使われた石材です。墓石をはじめ燈籠、狛犬、鳥居などに使用されるほか建築用にも使われています。

今から1500年以上前の火山噴火物が海底に堆積してきた安山岩質火山礫凝灰岩で、大田市温泉津町福光が主要な産地です。この石材は、淡い青緑色を基調として黒、白などの火山礫のブロックを含んでいることが特徴です。



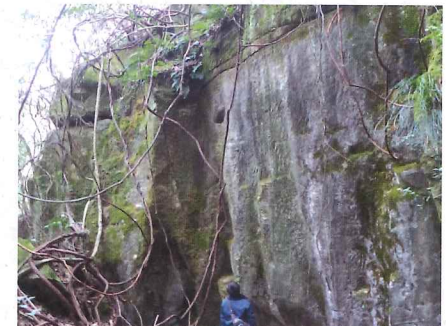
清水の石切場

石見銀山温泉津・沖泊道の道脇にある凝灰質砂岩の石切り場です。大田市内には各所に中小の石切り場が点在しています。



神畑石切場

凝灰質砂岩を切り出した石切り場です。船積に適した海岸沿いにあります。



大畑石切場

16世紀後半～17世紀初頭に使われた白色凝灰岩の石切り場です。

文字を見る

石造物にはさまざまな文字が刻まれています。これを読み取ると、製作した人々の意図や知識が見えてきます。銀山では仏教、学術、海外など様々な方面の知識をもつ人々が居住していたことがうかがえるのです。



銀山地区・定徳寺脇墓地の墓標

年号と干支を読んで、造られた時代を推定しよう



年号の部分が大きくかいているね。「○○元戌寅○月廿三日」とだけ見えるけど...

十干十二支の「戌寅（つちのえとら）」の文字はわかるね！60年ごとにある年だよ。

江戸時代では何回あるの？

1638、1698、1758、1818年の4回あるんだ。○○元が戌寅の年は文政元年（1818）しかないから、これはその年に亡くなった人の墓石ということだね！

梵字・種字



梵字は、古代インドのブラーフミー系文字に由来する仏教文字です。これは「阿弥陀如来」を一字で表す「キリーク」という梵字です。浄土信仰ではよくみられるものです。

温泉津地区の石塔



これは「大日如来」を一字で表す「バン」という梵字です。真言密教では世界の中心にいる仏とされます。

石見銀山・石銀地区の宝篋印塔

「篆書体」が現れた！



宝篋印塔の塔身に刻字された「篆書体」の文字（石銀地区）



これは文字なの？宇宙人のメッセージ？



とても不思議な文字だね。「篆書体」という古代中国の秦王朝で発明された漢字の原型の書体だよ。今でもハンコなどによく使われるよ！



石見銀山ではよく見つかるの？



これは、17世紀前半のお墓に刻まれたもので、当時の日本国内ではとても珍しいものだ。篆書体の文字が日本で流行するのは18世紀になってからだね！石見銀山でも初めての発見だよ！



何と書かれているの？



「即」と書かれているので、元は「即身是仏」や「即身菩提」などの仏教の言葉の一部だと思うよ。墓塔の四面に刻まれていたんだ！



なぜ、そんな珍しいものが石見銀山にあるの？

ヘルプ・ミー！

ナゾの部分が多いけれど、石見銀山の銀生産の中心部には様々な知識を持っていた人達が住んでいた証拠といえるね！

衝撃！危機迫る石造物

この写真は、同じ石碑を撮影したもので、左は2001年撮影、右は2025年の撮影です。左の写真では、碑面の端の方に剥離がありますが、9割以上の文字は読むことができました。ところが、2025年には石碑の表面の文字は全てが剥落して、一文字も残っていないのです。1811年に造られたこの石碑は200年余りの歳月で石碑としての役割を終えたのです。

石見銀山周辺の石造物は、白色凝灰岩や福光石など軟らかくて加工しやすい石材を多用しています。これらの石材を使用した石造物は、屋外にあると風化しやすいのです。多くの石造物が危機に直面していることを実感します。

「副道夷陰碑」文化8(1811)年
津和野・笹ヶ谷銅山の鉱山師・堀伴徳（堀家10代）と日原鉱山の鉱山師・藤井義孝は、飯原～西田～降路坂の街道を私費を投じて修理しました。その功績に感謝をした西田村の人が立てた石碑です。撰文・書は佐和華谷と息子の世魚（11Pを参照）によるものです。



石見銀山の特選石造物

板碑 中世を通じて板碑文化が希薄だった石見地域に板碑を導入したのは果たしてどのような人達なのでしょう？



大田市温泉津町井田にある板碑です。宝暦4年(1854)の紀年銘があります。
板碑造りが衰退した時期なので、新造ではなく中世に造られたものが破損したので造り直した可能性があります。



仏像の光背のような形なので、「光背形板碑」などと呼ばれています。石見銀山や温泉津に集中的に存在しますが、山陰地域ではあまり見られないものです。



銀山最古の年号をもつ自然石板碑だよ！



初代奉行・大久保長安と 2代奉行・竹村丹後守の墓



勝源寺境内にある2代奉行の竹村丹後守の墓は、中型の宝篋印塔とそれを覆う石廟がセットになっています。大久保長安のように巨大石塔を造ることは遠慮したのでしょうか。
ただ、石塔を納めた「石廟」は、大久保長安が佐渡の大安寺に造った逆修塔の「石廟」をモデルとして造っています。師匠であった大久保長安への敬愛の気持ちが感じられます。

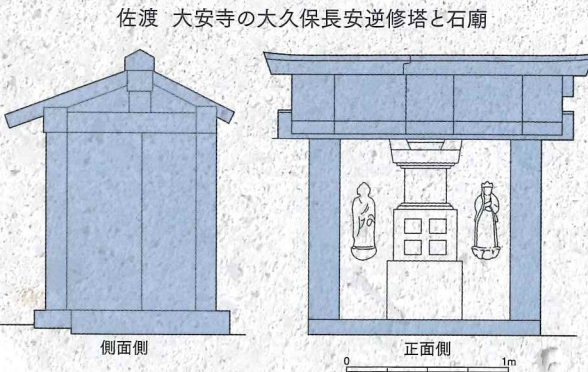
師匠への気持ちが墓石にも表れているよ！



大久保長安の生前に造られた逆修塔は、石見銀山随一の巨塔でしたが、現在は大破した状態で大安寺境内の片隅にあります。



大久保長安は死後に重罪人とされ、一族も滅亡しました。しかし、江戸時代後期には、銀山全盛時代を招いた大恩人として再顕彰され、寛政6年(1794)には大森の大安寺境内に五輪塔と紀功碑が建設されました。

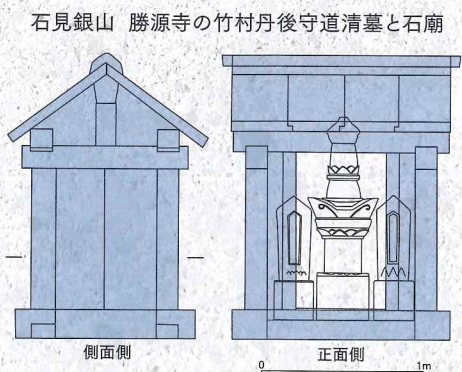


佐渡 大安寺の大久保長安逆修塔と石廟

型式:越前式石廟(奉行墓型式)、平入り・切妻屋根
石材:笏谷石(福井市産)、火山礫凝灰岩
人物:石見銀山初代奉行 大久保長安



佐渡にモデルがあったとは知らなかったよ！



石見銀山 勝源寺の竹村丹後守道清墓と石廟

型式:越前式石廟(奉行墓型式)、平入り・切妻屋根
石材:福光石(大田市温泉津町産)、火山礫凝灰岩
人物:石見銀山2代奉行 竹村丹後守道清

銀山御料随一の文化人・佐和華谷

佐和先生は、京都の貴族にも知られた儒学者だよ！

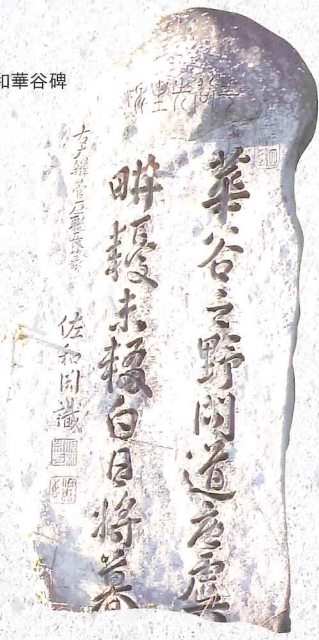


銀山蔵泉寺口の佐和華谷碑

石見銀山随一の文化人・儒学者の残した足跡

佐和華谷(1749~1831)は、石見銀山御料九日市(現・美郷町)の本陣・原田屋に生まれました。青年期に京都で儒学を学び、文化人として名高い頼山陽などとも交流がありました。また、南画家の中林竹洞に師事し、絵の修行も行っていました。
華谷は、勤王思想を持つ人々とも交流があったため、幕府役人に嫌疑をかけられ高野山に逃れ出家しました。後に郷里近くの石見銀山・観世音寺の住職となり、多くの弟子を育てました。
石見銀山では大安寺の大久保長安紀功碑(撰文は代官菅谷長昌・1794年造立)の書を現したほか、大森の照善寺の文亭先生(安井好章)を顕彰する碑(1809年造立)や大森の宮村にある龍蔵山之銘碑(1818年造立)について、撰文・書を華谷が行っています。
銀山蔵泉寺口の天満宮跡には、華谷没後10年目に息子や弟子が建立した顕彰碑(1841年造立)が所在しています。

大安寺の大久保長安紀功碑には、佐和鼎として署名がある



江戸の終わりと近代の始まり

近代の始まりが石見銀山にあるなんてすごいね！



歴史は繰り返す
江戸時代は石見銀山の掌握から始まった。
そして、近代の始まりも石見銀山にあった。

石見銀山には江戸の終わりと近代の始まりの「礎」もあります。
慶応2年(1866)7月、幕長戦争石州口の戦いに勝利した長州藩軍は石見銀山御料を接收し、代官所に本陣を置きました。長州藩士は、石見銀山下河原地区に藩祖毛利元就を祀った長安寺があることを知っていました。当時火災などのために衰退していた長安寺を復興し、藩の興隆を祈願することになったのです。
翌年4月には遷宮が行われ、8月に祖霊社が完成しました。境内には駐屯する長州藩幹部や各諸隊単位などで競うように石造物の寄進が行われ、その数は40基以上に達しました。中でも、第三大隊一番中隊が寄進した小鳥居には、「皇紀元二千五百二十七年」の年号が刻まれています。西暦で表すと1867年です。石造物に刻字された紀元・皇紀年号として確認されたものでは国内最古の事例です。
日本近代の社会・政治と切り離せない「紀元・皇紀」を先駆的に用いていることは、幕末にあって近代社会の到来を告げる記念碑的な存在ともいえるのです。



銀山下河原に鎮座する豊栄神社

豊栄神社の小鳥居(破片) 年号部分は災害などで大きく損傷していますが、寄進台帳と照合すると文字の復元が可能です。



長州藩諸隊が寄進した燈籠(銘文) 歩兵隊の編成は、西洋式の近代的なものになっていました



現状

文字の復元後

石造物めぐりマップ



まとめ

石見銀山では、戦国時代に銀山開発が始まって以来多くの人々が生活し、そしてここで亡くなりました。石造物には人々の日々の信仰や活動、そして亡き人に対する供養や追慕の思いが込められているのです。

前近代の日本社会は、概ね農業を中心とした社会だったのですが、石見銀山は銀鉱山を中心とした鉱工業中心の社会でした。石造物造立に対する思いは農村部に比べても強いものがありました。

これまで、数多くの石造物を紹介しましたが、石見銀山や温泉津などの港町、街道を見学する際に路傍にさりげなくある石造物に目を向けると、かつてこの地で生活していた人々の生涯や世界観を垣間見ることが出来ると思います。

石造物の見学について

- ・私有地に所在する石造物については所有者の承諾を得て見学して下さい。
- ・石造物は、歴史的な文化財であると共に先人が残したお墓や信仰の対象でもあります。見学にあたっては毀損のないように注意して下さい。

ルールを守って
見学しようね！



【参考文献】

島根県教育委員会・島根県文化財愛護協会 1987『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』
島根県、大田市、温泉津町、仁摩町 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書平成5年度～平成10年度』第3冊
島根県教育委員会・大田市教育委員会 2002～2025『石見銀山遺跡石造物調査報告書』1～23

【編集】島根県教育委員会・大田市教育委員会

【発行】島根県教育庁文化財課世界遺産室
〒690-8502 島根県松江市殿町1番地

【印刷】有限会社松陽印刷所